

藤木 秀朗

2012年10月27・28日。東京で国際映画祭が華やかに開催されていたころ、熊本では小さな、しかしこの上なく有意義な、魅力溢れる映画祭が開かれていた。東アジア市民共生映画祭と名付けられたその映画祭は、市民のための市民による映画祭という意味で、通常の国際映画祭にありがちな、作り手や配給会社のための映画祭やシネフィルのための映画祭とは一線を画している。その一方、他にあまたある地方映画祭とも異なり、単なる町おこしのための映画祭でもない。それは、国境を越えて市民の共生を実現していこうという明確な社会的・実際的な目標に根ざした映画祭だった。

私がこの映画祭に興味をもったきっかけは偶発的である。映画観客について「市民」という切り口から研究しようと手当たり次第にインターネット上で調査をしていた際に、たまたま検索エンジンに引っかかったのがこの東アジア市民共生映画祭だった。映画の上映事情を網羅した『地域における映画上映状況調査 映画上映活動年鑑2010』（一般社団法人コミュニティシネマセンター）によれば、2010年に日本国内で開催された映画祭は確認できた限りで136あるというのだが、この熊本の映画祭はそのリストにすら載っていない。しかし、ウェブサイトでの案内を見て、私の目には、他のどの地方映画祭よりも魅力的に思えた。幸いなことに開催時期は一ヶ月後と、タイミングが良い。私は迷わず熊本まで足を運ぶことに決めた。

実際に参加してみた映画祭は期待以上に刺激的だった。今回で5回目を迎える今年の映画祭では4本の映画が二日間にわたって上映された。その一つは、韓国KBSテレビのプロデューサー、リュ・ジヨル氏が監督したドキュメンタリー『モンドラゴンの奇跡』（2011年）。

リーマンショック以降の経済危機にあっても雇用を増やし安定的に成長しているスペインの協同組合企業に、新自由主義的社会モデルに対する対案としての可能性を見出している。二本目の映画は、台湾に在住しているフィリピン出身のウィ・ディン・ホー監督による『ピノイ・サンデー』（2009年）。台北に暮らすフィリピン人出稼ぎ労働者たちのおかれた状況を、道端に捨てられた赤いソファをモチーフにコミカルに、しかし痛切に描写している。残りの2本は、日本でも一部の都市ですでに公開されている、韓国出身のキム・テギョン監督による『クロッシング』（2008年）と『裸足の夢』（2010年）である。前者は北朝鮮の炭坑町に住む、とある家族が貧困ゆえに国境を越えて離散を強いられる物語を、後者は長い内戦状態にある東ティモールで韓国の元プロサッカー選手が少年サッカーチームを結成して指導する物語をそれぞれドラマチックに見せている。これらの映画はすべてトランスナショナルもしくはコスモポリタンのテーマをもっている点で共通している。（ただし、映画の選定はテーマだけでなく、財政的な問題も関係しているという。高額なレンタル料が請求される日本映画に対して、韓国映画などは製作者や配給元に映画祭の趣旨に賛同してもらえれば無料もしくは低料金で提供してもらえとのことであった。）

これら4つの映画作品は3つのセッションにまとめられており、それぞれのセッションで3人のパネラーからなるパネル・ディスカッションが行われた。『モンドラゴンの奇跡』は「東アジア共生と協同組合」というテーマのセッション、『ピノイ・サンデー』は「東アジアの多文化共生」というセッション、そして『クロッシング』と『裸足の夢』は「東アジア共生を眺める韓国の視線」という

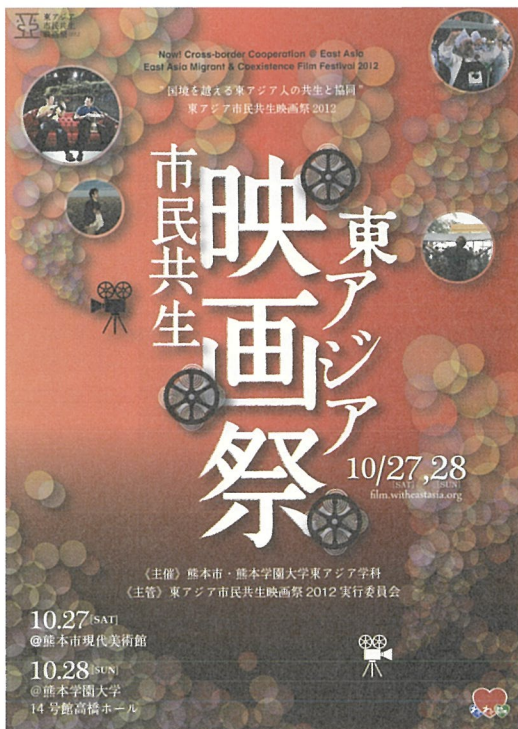
セッション、といった具合である。これらのセッションのパネラーには、リュ・ジヨル監督とキム・テギョン監督も名を連ねた。総じてこの映画祭の魅力は、映画作品そのものだけでなく、むしろ映画がディスカッションと組み合わせられたところにあると感じた。

映画祭は、2007年の創設以来いくたの困難に遭いながらも確実に成長してきた。「東アジア移住・共生映画上映会」という名称で始めた第1回は熊本学園大学の図書館のホールで行われたという。その後、映画祭の規模は大きくなり、2010年にはロシア沿海州のウスリースクでも関連映画祭が開催された。しかしその一方、当初から受けていた大学からの資金援助が途切れ財政的な危機に見舞われたこともあった。とはいえ、思いがけなく熊本市からのアプローチがあり、財政支援の申し入れがあったという。折しも熊本市は2012年4月から政令都市に移行することが決定し、行政当局は熊本を東アジアの観光都市として売り出すために力を入れ始めていた。そこで、市の新設のシティプロモーション課が目をつけたのが、東アジア市民共生映画祭というわけなのだ。

今回の映画祭に参加してみて私の印象に残ったことは多々あるが、ここではとくに2点を挙げておきたい。

一つは、よい意味で手作り感覚があり、親しみの持てるイベントだったということだ。もともとこの映画祭は熊本学園大学東アジア学科の申明直教授の発案により開始されたものであり、スタッフの多くは当学科の学生からなっている。これに加えて、熊本の移住に関わる社会団体「コムスタカ——外国人と共に生きる会」のメンバーたちが協力しているということであった。映画祭はこうした人たちのボランティアによって運営されている。しかし、スタッフは皆、受付から進行、機器の扱いに至るまで「素人」とは思えないほどきびきびとして洗練された対応と動きを見せていた。その一方で、オープニングでは、スクリーンと客席の距離が近い緊密な空間の中で、学生たちがKポップグループ・少女時代のダンスや、中国の歌を中国語で披露するなど、学園祭的な雰囲気を漂わせながら、その場を共有する人たちにトランスナショナルな身体的一体感を感じさせる工夫も見られた。申教授によれば、こうした催しは学生たち自らが企画し実行したということである。ここには映画祭が実践的な教育の場としても機能していることが伺われる。『モンドラゴンの奇跡』の日本語字幕の作成も教員の指導のもとで学生たちが協力して行ったということであった。

印象に残ったもう一つのことは、「東アジア共生と協同組合」のセッションだ。ここで課題とされたのは、いかに新自由主義の風潮に対抗しながら、労働問題や食の問題を克服すべく国境を越えた市民ネットワークを形成できるかということだった。パネラーの一人、リュ・ジヨル氏はモンドラゴンの取材を通して自らが感じたことを語り、もう一人のパネラーの「バリの夢」——ロシア沿海州の東北アジア平和基金が支援する社会的企業——代表の金鉉東氏は、沿海州の高麗人の苦難の歴史を紹介しつつ、この少数民族の人たちが中心となって運営している「バリの夢」が、有機農法による大豆食品を生産し、国境を越えた販売経路を開拓しようとしている状況を紹介した。そして、3人目のパネラー、グリーンコープ生協くまもとの福祉委員長の佐々木郁江氏は、自分が普通の市民であることと、仲間には立派な指導者がいるわけではないことを強調しつつ、フィリピン・ネグロス島での民衆交易へと参加と協同組合ネットワーク構築への試みについて話した。このあとの質疑応答では、生協関係者だというフロアの聴衆の方から、



国内法として施行されてきた現在の生活協同組合法では越境的な活動を行っていくことに対して規制が多く、困難が多いという発言もあった。こうした一連の話から私がとくに痛感させられたことは、ここでは、TPP問題をめぐる議論などでしばしば陥りがちなグローバリズム対ナショナリズムの二項対立とは異なる模索が行われているということであった。すなわちこのセッションは、単に多国籍企業から国内の産業・農業・消費者を守るという自国中心主義的な方向性ではなく、国、民族、人種などのアイデンティティや住む場所の違いを越えて市場原理中心主義から自分たちの生命と生活を守るために手に手を取り合い、国境を越えた共生経済を確立するという方向性を目指しており、私にとって（そしておそらく他の多くの参加者にとっても）そのことを強く考えさせられる機会になったのだ。

こうした方向性は、この映画祭企画の立役者である申教授の意向によるところが大きいようである。近代朝鮮・韓国文学を専門としながらも、1980年代にソウルの延世大学に在学していたころから労働問題に関心があったという彼は、2000年代初めに東京外国語大学の客員教員に赴任して間もなくしてネパールを訪れ、その際に、カトマンズのストリートチルドレンに遭遇し、貧困問題について深く考えさせられたという。そこでの経験が、東アジア市民共生映画祭の開催とともに、2009年のNPO法人・東アジア共生文化センターの発足につながった。このセンターでは、とりわけ「東アジア共生コーヒー」に力を入れている。これは、ネパールの西部山岳地帯グルミの有機栽培コーヒー生産者組合とパートナーシップを結びながら、そこで生産されたコーヒーを日本や韓国などで販売し、その収益をネパールの貧困問題の改善に役立てることで、子どもたちの教育環境の整備、ストリートチルドレンの防止、さらには太陽光パネルの設置につなげようという試みである。こうした試みが、国境を越えた市民レベルのつながりを広げていく点で、映画祭と重なり合うものであることは言うまでもないだろう。

映画祭はともすると賞の獲得ばかりに目が向けられがちである。また、制作者の知名度の獲得のために、あるいは町のブランド化のために利用されていることも多い。もちろん、そうしたことは必ずしも悪いことではないが、そのために作品の美的な評価や自足的な評判

ばかりが追求され、映画（祭）を広く社会に役立てる可能性が見過ごされてしまうとすれば残念である。私にとって今回の東アジア市民共生映画祭への参加は映画の社会的有用性の問題と国境を越えた市民ネットワークの必要性を改めて考えさせられる機会となった。——映画祭開催中の忙しい中でインタビューに応じてくださった申明直先生に感謝申し上げます。